

遠賀川流域の歴史

遠賀川工事事務所 尾木 幾子

1. はじめに

最近、国民の環境意識の高まりの中で「河川は流域の文化、歴史に重要な役割を担い、人々の生活を発展させてきた」という認識も高まってきた。そこで、遠賀川の担った役割を流域の自然環境や歴史を通し、究明することで、この資料が地域住民との共通の話題として提供できればと願うものである。

2. 遠賀川流域の現況

馬見山を源とする遠賀川は、流路延長61km、流域面積1030km²。流域市町村は6市25町1村で流域内人口 698,256人の一級河川で生活圏域は福岡、筑豊、北九州の三つに分かれている。

3. 流域の歴史

古代から現在までを地形の変化、遺跡や発掘資料、文献等を基に、集落の発達、文化・産業の発展、水害や治水・利水の歴史などにまとめてみると次頁の年表のとおりである。

古代の遠賀川流域は「古遠賀湾」と呼ばれる湾であった。貝塚の数も福岡県内で一番多く、最奥の貝塚は河口から約16km上流にあり、河口の貝塚からは縄文後期の人骨が出土している。

弥生時代には陸化が進み、水稲栽培の最適地となり稲作が定着する。数多い遺跡の中で全国屈指の「立屋敷遺跡」と「立岩遺跡」が発掘され、甕棺墓群や副葬品などからこの地域の最高権力者がいたと思われる。

古墳時代を代表する遺跡に、「王塚古墳」と「竹原古墳」があり、共にこの時代の代表的な装飾古墳と言われている。また、下流域には共同墓地である装飾のある横穴墓が多数見られる。

10世紀に出された「延喜式」によると筑前15郡に郡衙が、豊前国に6座が置かれ、太宰府へ通ずる交通の要所に筑前国に夜久、島門、伏見、網別、豊前国には田河などの「駅」が置かれ、仏教文化が発展する。

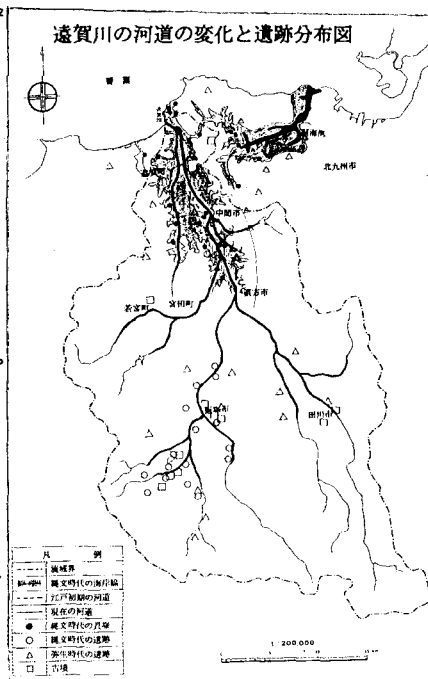
12世紀頃には都へ貢物の「鎮西米」を送るために底の浅い川舟「ひらた」で川を下る水運が発達した。

室町時代には雪舟や宗祇がこの地を訪れ、雪舟は「亀石坊庭園」や「魚楽園」などの庭園を宗祇は紀行文「筑紫道記」を残している。また、良質な砂鉄を用い、名声を博した茶の湯釜「芦屋釜」が生まれた。

1600年黒田長政が筑前に入封し、文化・産業面で画期的に進展する。1612年本川改修と堀川開削の大計画を打ち出し、1613年築堤や新川掘削等の工事に着手し、1628年完成。現在のような流路となり、1748年の普請で河口近くは現在の姿となった。一方、堀川開削工事は1621年着工したもの一時中断し、1804年寿命より折尾金山川まで16,000m、川幅 8~18mの堀川が完成した。治水目的で開削された堀川も開通後は、利水と舟運の役割に変化していった。また、これらの治水事業に加え、沼沢や浮州の埋立て、新田開発を行い、1621年漆生用水、1660年花ノ木堰、1774年岡森堰、1838年五か村用水が完成し、石高も増加していった。

遠賀郡香月村(1478)と田川(1587)で石炭が発見され、江戸時代には本格的に採掘され始め、1837年福岡藩は石炭専売の仕組み法を実施。この頃遠賀川は舟運が盛んとなり、福岡藩も小倉藩も水運を重視し「船場」や「盤」を設け米や石炭、糧の実、生蠟、材木、瓦、鶏卵、紙などに通行税をかけるようになった。

1871年廃藩置県の詔が出され、1876年現在の福岡県が成立し、旧藩の境界は消え、遠賀川流域は筑豊地域と呼ばれるようになる。北九州工業地帯が生まれ、大手資本の参加により筑豊炭田が最盛期を迎え、1891年



明治に入ってから洪水が頻発し、1906年内務省直轄の河川改修工事に着手、1919年 3月総額 4,860千円を費やし第一期改修工事を終了した。その後、昭和20年10月15日より直轄河川となり、現在に至っている。

以上のように遠賀川流域の歴史は、奥行きが深く、遺跡や発掘資料から富裕で文化的に高度な地域であったことが伺える。この偉大な歴史を未来を担う子供達に引き継ぐことが我々の役目である。

遠賀川流域の年表

– 233 –